ーただキリストと共に歩むー

水戸無教會

編集　半田梅雄

第十三号

引っ込んでろ、悪魔（サタン）

半田梅雄

待望久しかった塚本先生の口語新約聖書第二分冊が世に出た。これでルカの一部を残して共観福音書マルコ、マタイ、ルカを本当の口語によって自由に勉強が出来るようになったことは限りないよろこびであり、感謝である。この改訳第二分冊を手に取って、マタイ四の十にある「引っ込んでろ、悪魔（サタン）・・・・」に眼をふれた時、いきなり電気にふれて飛び上ったような驚きを覚えた。それは眼の前にイエス様が居られて、この言葉をこの耳で直かに聞いたような鮮かな印象であった。何というすばらしい日本語であろう。然もこの言葉が四十日四十夜の断食の後、空腹という絶対的生理現象の隙間に近よってきた悪魔の三大誘惑に対して、イエス様が最后に発せられたものである丈にその意味と語気と態度は強烈な響きをもって迫ってくる。聖書は神の言であり、生きた生命の言葉である。そのことは既に云い盡され、且信ずるすべての者に真理であろう。だが本当の意味でイエス様がユダヤの街で人々に語ったような状態で私たちはこれを読むことが出来なかった。

生きているということは、イエス様が今の日本人であり、今の日本語で私たちに語って下さることである。

因みにここのところは古い訳では、「サタンよ、退け」聖書協会の口語訳でも同様の「サタンよ、退け」であり、キリスト新聞社のは「退れ、サタンよ、」となっていて何れも今の日本の話し云葉ではない。それがそれぞれの訳の特徴と限界を示すものなら、塚本訳が世に出た意義はまことにはかり難い神の恩恵と云わなければならない。

日本人が、日本人のイエスから、生きた日本語で福音を聞く、これ以上の幸福はまたとあるまい。このことは、英語国民が現代英語をもって、ロシヤ人が現代ロシア語をもって福音を聞くチャンスが与えられることを裏書きすることになろう。この意味から廿世紀は原子力をもった以上に特徴ある世紀と呼ばれてよいであろう。

尚マタイ四の荒野の誘惑の中で、古い訳で有名な「人の生くるはパンのみによるにあらず」は協会訳「人はパンだけで生きるものではなく」キリスト新聞訳「人はパンのみによらずに」に対して「パンがなくても人は生きられる」となって著しい特徴を示している。原語についてくわしい知識のない私たちには今直ちにかれこれ云えないが、聖書の言が訳し方によって違うこと、まして個々の解釈に千差万別のあることは凡そ想像出来ると思う。勿論曲解や誤訳はいけないが、たった一つの真理が、万人万様に生かされるその無限の巾と深さに対して驚嘆しないものは、〝信仰のみで人は救われる〟ことを信じていないのである。

第一回の災禍とヨブの信仰

―ヨブ記研究（七）―

一章一三節～二二節

大森孝夫

嵐の前の静けさ！天上の問答の結果を全く知らざりしヨブの一家はその日いつもの如く富と名誉とに包まれて、平和で楽しい集いをなしておりました。家長たるヨブは一週第一日目の努を果すべくその朝は早くから起き出で、子供達を集めて彼らを潔め燔祭を捧げました。（一の五参照）子ども達もこれらの行事が終了してから長兄宅で祝宴を始めましたので、神を畏れるヨブもやっと感謝と満足を以て居間に打ち寛ぎ腰を下しました。がその時、平和は破れ、疾風怒濤、突如として第一の使者が息を切って飛込んできたのです。彼はヨブの多くの僕、牛、ロバ（一の二参照）が、アラビヤの一支族たるシバ人によって殺され、奪われた事を告げました。アッという驚くべき第一の報告がまだ終らぬうちに、続いて第二の使者はヨブの羊と羊飼が雷電によって焼き殺されたことを報せました。二重の災禍と思う間もなく第二の使者が去らぬうちに第三の使者は東方のカルデヤ人によってヨブの駱駝と僕が掠奪、殺害された旨の急報したのです。然し災禍はそれでも止まず、サタンの陰謀は次から次へと実行されその第三報が終らぬうちに最も悲しむべき報告は第四の使者によってもたらされたのです。ヨブの息子、娘たちは宴盛んなりし頃突如の旋風により家屋の下に悉く圧死した！これらの四つの災害は人間から来るものと自然界から来るものとに区別されますが、後の使者の報告ほど厳しく、たとえ東方第一の分限者たるの財産を失っても第三の使者までは座してその報告を受取っていたさすがのヨブもすべての子どもの死という凶報に接した時は思わず起ち上り、今朝自分が潔め、あれ程元気であった子を思うと悲嘆の絶頂の果て、上衣を裂き髪をきり落してしまいました。かゝる深刻な災禍はすべて天上に於ける神とサタンの会議の結果もたらされた訳でありますが果してサタンの指摘した通りヨブの信仰は利慾の為のものであり彼は神を詛うに至ったでありましょうか。いいえ、断じてそうではありません！彼は神に対する絶対服従を示すべく地に平伏しました。ヨブは如何なる困苦にあっても神を拝することを忘れなかったのです。そして悲痛の極の中にあっても理性を取り乱すことなく「我、裸にて母の胎を出でたり、又裸にて彼処に帰らん。エホバ与えエホバ取りたまふなり。エホバの御名は讃むべきかな。」と神の御名を讃美せる言葉が厳として発せられたのであります。世にこれ程崇高な言葉があるでしょうか！「なんじらヨブの忍耐を聞けり」（ヤコブ五の二）この第一の災禍はヨブを

して筆舌に尽し得ぬ不幸と悲歎の谷底へ蹴落しましたが、彼はよく耐え忍ぶと共にそれを乗越えてこれらの災禍、艱難も全ては神の摂理の御手の中に存ることを信じサタンの指摘とは全く反対に絶対信頼、絶対服従の讃美の声を叫んだのであります。サタン大失敗！サタンよ、ざまあ見ろ！であります。たとえ火の中、水の中、神の御旨ならば、我いとわじとのヨブの勇壮、悲壮の信仰に神は凱歌を揚げさせ給うたのであります。私は武士道的信仰を批難する宣教師のあることを知っています。然し、古来から悩める者、苦しめる者を振い立たせてきたこのヨブの信仰に誰か武士道的気魄、武士道的信仰を認めぬ者がありましょうか。私たちは茲に日本武士道の極致に通ずるものを見るのです。確かに武士道は神ならぬ者に忠節を尽したのでありますから根本的には誤りでありましょう。然し、忠臣二君に仕えず、全てを主君に捧

げ尽くすという日本武士道の忠誠無比、純正なる献身の精神そのものに誰か軽べつするを得ましょう。刹那に生きるアメリカ享楽主義、一切はパンによりて解するというソヴェト共産主義に毒されて現代日本人は純粋な意味での献身という美徳を失ってはいないでしょうか。私たちは断じてこれを失ってはなりません。それよりか、かえってかつての封建的残滓を拭い去り、己の罪を悔改め今こそ砕けた心もて神に献身すべきが日本人すべての使命であり、日本を亡国より救う道は、国民すべてが神に献身するということ以外に絶対に道はありません。勤王精神発祥の地と誇る水戸人よ、ヨブの信仰を述べしこの一章二十二節により真の忠誠とは何かを学んで下さい。また武士道的、日本的キリスト教を排他して止まざる宣教師の方々よ。速刻、多磨墓地を訪れ内村鑑三の墓碑銘を見、

I for Japan ;
Japan for the world ;
The world for Christ ;
And all for God.

「余は日本のため、
日本は世界のため、
世界はキリストのため、
そしてすべては神のために」

という彼の信仰を述べしこの文を寫し取り、帰ってヨブ記をひもとき両者の信仰を比較検討して下さい。あなたは何を発見しますか。ともあれヨブの信仰はサタンの陰謀を破砕し、神の栄光をあぐると共に、私たち日本人の心情に強く訴え響くのであります。

第一の証し人

―使徒行伝研究（八）―

半田梅雄

キリスト教は、万人に万様の形で臨む。然し、その本質は極めて単純にイエスのキリストである証人として用いられる点にある。二千年の歴史は実にキリストに関する無数の事件を生み続けた。だが何人がキリストの証人以上のことを爲したであろう。ルーテル、クロムウェル、リンカーン、カント、ゲーテ、ミルトン、ダンテ、ベートーベン、偉人中の偉人、学者中の学者、藝術家中の藝術家と称される人々も、、詮じつめるところその業を通してキリスト（神の子）を証ししたに外ならなかった。

この証人の第一号がわがペテロであった。

ガリラヤ湖畔の漁師の息子ペテロ、岩と名ずけられるにふさわしい頑丈な肉体と積極性を持ったペテロ、然し、幾度か「信仰薄き者」と嘆かれ、「サタンよ」とイエスに叱咤され、遂に十字架の日にイエスの弟子であることを三度否んだペテロ、その若者らしい、如何にも生きている人間らしい間違いだらけの自分を省みてさめざめと泣いた弱い人間ペテロ、このペテロにも尊き使命を果すべき時が遂に来た。ペンテコステの日に彼は他の十一人と共に眞の岩に作り変えられた。かつて師の云われた事はすべて彼自身の全身全霊をもって肯定される時が来たのである。あゝわが主イエスの事実が雲のように彼の胸中に吐け口を求めている。

○ペテロは立った。何の躊躇するところなく彼は立った。

「ユダヤの人たち、ならびにエルサレムに住むすべてのかたがた、どうか『この事』を知っていただきたい。そうだ『この事』は語らなければならぬ。例え無学でも、病床にあっても、その日の生活に追われていても、『この事』丈は知ってもらいたい。又知らせることは出来る。又その為に我らの残る生涯はあるのだ。そうでなければ、我らはもうこの世に用のない人間である。永遠に神のみ傍に仕えればよいのである。何を好んで恥多い生涯をこの上に重ねる必要があろうか。

ペテロ（続）

石原秀志

ー「ヨハネの子シモンよ、汝此の者どもに勝りて我を愛するか」ーヨハネ二一・一五

復活し給うたイエスが語りかけて居られる相手は、あの差出がましい弟子、己こそは十二使徒のうちで最も信頼されるに適わしい人間だという自負がいつもつきまとっていたシモンではない。人間としての自信や決意がどんなに惨めで頼りないものであるかをいやという程知らされたシモンであり、それにも拘らず、死に至る迄父なる神に対して従順と誠実さとを失われる事のなかった主イエス・キリストが、そのような失敗とつまづきだらけの弟子である彼を変る事のない真実を以て愛し続けられた事実を今やひしひしと身に沁みて感ずる事の出来るシモンなのである。

「あなたはこの人たちが愛する以上に、わたしを愛するか」とイエスは彼に問い給うた。とイエスは今シモンから弟子たちの誰よりも深い愛を期待し、要求し給う。深く愛された者はそれ丈深き愛を以て答えなければならない。（コリント後書五・一五）。シモンにとっては、己に対する師イエスの愛が如何に深いものであるかという事は今や凡ゆる比較を超絶した動かすべからざる事実である。なぜならば、それは彼の為に十字架にかけられ、彼の為に死より復活し給うた方の愛であったから、そしてその愛、その事実を通じて一人の人間が罪と暗黒の深い渕から赦されて新しい生命の世界に移されたのであったから。

「主よ、そうです。わたしがあなたを愛する事は、あなたが御存知です」。今や自負でもなく、一時の感情でもなく、此のような愛（アガペー）を以て彼に臨み給うた主イエス・キリストに対するゆるぐ事のない愛情（フィレオー）を最も自然に、静かに、併し心よりの誠実を以て表白する時が来たのであった。かつてあの鶏の鳴く前に共に暖をとっていた者たちの追求にも拘らず、「私はその人を知らない」と三度迄主の弟子である事を否定した彼が、今は甦り給うた主に対する愛を三度迄繰返して告白する事が出来たという事は何という大きな転換であった事か。

此の彼の謙遜に溢れた告白に対して「わたしの羊を養いなさい」と主は繰返し命じられた。そして同時に、それが如何に困難と重荷に満ちているかを暗に示し給うた。しかし、それは亦彼にとって如何に光栄に満ちた任務であるかを思いつつ、心よりの畏びと責任感とを以て此の御言葉を受取った事であろう。

「わたしに従って来なさい」最后に主はこう彼に宣言された。幾年か前のあの感激すべき日に、初めて若きシモンはアンデレに導かれてイエスの所にやって来た。かくてその時以来彼はイエスの弟子となったのであった。しかも、あの感動に満ちた晩さんの夜、イエスは「主よ何処においでになるのですか」と問う彼に向って「あなたは私の行くところに今はついて来る事は出来ない」とはっきり言われた。［ヨハネ一三・三六］その主が、今彼に従って来る事を命じ給うのである。それは、甦り給うた主の愛に完全に捉えられ、唯新らしい愛に於てのみ生きるものとされた彼シモンに、今新しく与えられた「召命」に外ならなかった。何年もの間彼は彼自身の誠実さを以てイエスの弟子としての途を歩いて来た事を知っていた。然るに、今此の新しい召の御声を聞いた時、初めてそこに復活の主の弟子とされた自己を見出したのであった。今やイエスの弟子として生きる事は迫害と光栄の途を行く事を意味する。然し、如何なる困難も、迫害も、更には死も、彼をして此の復活の主イエス・キリスト

の愛から離れさせるものはあり得ない。此の事をやがて彼は身を以て証明したのであった。

復活の主に出会った時に、彼はほんとの意味でペテロとなる事が出来たのであり、その生命と力とにふれた時に、より正しい意味でキリスト・イエスの使徒とされたのである。

小貫兄の御結婚を祝して

大森孝夫

この度の小貫兄のご結婚は誠に甚ばしく、私は心からお祝を申し上げます。結婚の意義、目的に就きましてはお二人とも前々から塚本先生の「結婚と信仰」をお読みになって居られることを伺っておりますし、更に本日は主に在りて特に敬愛する諏訪先生の御講話を頂くと共に多くの兄弟姉妹の感話も御座いましたので、お二人ともこの結婚の重大なることを一層痛切に体得されたことと信じます。そこで未だ結婚を与えられず、信仰の幼児たる私の如きが殊更これ以上何も申上ぐることは無い筈ではありますが一応私にも小貫兄に対するお祝の言葉として一言申述べることを許して頂きたいと存じます。私は先に、私なりに与えられた結婚問題に心を労しておりました際、私自身に言い聞かせるべく「水戸無教会」誌第四号に「結婚について」という小文を記しました。処でその小文の結論と申しますのは「結婚は利益問題でない。世俗問題でない。性欲問題でない。実に信仰問題である。結婚はキリストのため、神の御栄のためになさるべきであり、たゞたゞ神の聖意のならんことを祈る以外何一つ混入してはいけない。」ということでありました。本当に結婚と信仰とは一体であって眞の良き結婚は信仰生活に勝利を得ることであり、肉的、私事的結婚は信仰生活に敗北を招来する以外何もないのです。マタイ伝一九章四節から六節にかけては結婚に関するイエスの教えが述べられてあります。そこを学びます時に私たちは結婚とは神が一人の男と一人の女とを選び別たれて結び合されるという神聖、厳粛なものであることを教えられます。「結婚は悉く神の合せ給うたものであって、神の合せ給わざる結婚なるものは一つも無い。『斯く夫婦は神によって一つの軛に繋がれたものであって、神が一つになし給うた以上、人間が勝手にこれを離してはならない。』とはイエスの言い給うところの意味である。」これは以上の節に対する塚本先生の御講義の一端でありますが誠にアーメンであります。神はたった一人の男のために、この世のすべての女の中からたった一人の女を選び出し、たった一人の女のために、これまた世のすべての男の中からたった一人の男を選び出し給い力を合せて事をなせとこの一人の男と一人の女を同じくびきにつかせ給うたのです。そしてこのくびきの二人はこれから、神とキリストに仕え、人を愛すべく心を合せ歩調を揃え、一歩一歩と苦難をのり越え人生の道を歩んで行くのです。神は「人は父母を離れ其妻に合いて、二人のもの一体となるべし。」と仰せられました。この点に就いて今までと別な観点から結婚というものを見ます時、これは信仰なき私を示すことになるでしょうが私は結婚とは二人のものが一体となることの如何に困難であるかを知るためのものであるとも考えるのです。公式的に律法的に「二つのものが一つになれ」と云うことはいとた易くありますが、現実は極めて困難なものではないでしょうか。生命がけで真剣に一人の人を愛すれば愛する程、このことは実感を以て押迫ってくると思うのです。私は一昨年、山中湖に於ける黒崎先生の集会で藤多文一という老人の方に

お会いしました。この方の「けしのはな」という歌と随筆集の中にある一つのうたを読みます時、私はそのうたが強烈な勢で私に肉迫してくるのをどうしても押止めることが出来ません。それは「二十五周年によめる」というのうたのひとつであります。

「神の合せ給うものは人之をはなすべからずという戒めを、何度のろったことか」

魂と魂との火花を散らし血と涙をもて一人の男と一人の女とが純粋に愛し合い、愛し抜こうとする時人は果して何をなし得るでしょうか。純粋の愛、真の愛は人間のなし得るところではありません。私たちはひたすら神に祈り求むるのみであります。この意味に於きましても、まことに結婚生活は独身の時よりもより一層深い祈りの生活であると信じます。

ヨハネ伝にはガリラヤのカナの婚礼に於きまして、イエスもマリヤも弟子たちもその席に招かれたとあります。イエスをお招きしてこの婚礼、実にこれ以上の歓喜はありません。壮麗目をあざむく豪華な婚礼の宴、きらびやかに並ぶこの世の名士、然しイエスの臨み給わぬ時すべては空なのであります。されど私は信じます。この小貫兄の御結婚が神の選び給うたものであり、この席がイエスの在し給う席であることを！まことにここに於てのみ小貫兄お二人は堅き磐の上にあるのであります。お二人が神を畏れ、神を拝しキリストを信じ互に祈りつゝ歩むならば神は、お二人を守り助けて下さいます。そして更に神はお二人をこの世の馳場を勇敢に進み、信仰による凱歌を声高らかに揚げさせて下さるものと信じます。

実にお二人の結婚は神の祝福し給うものであります。どうぞお二人のこれからのホームが単なるスイート・ホームに非ずして「我家のまことの主人はキリストなり。」という神により、御栄光をあがめんための眞のクリスチャン・ホームでありますよう私は心をこめて祈るものです。

最後に信仰の詩人、八木重吉の詩を新しきスタートに立つお二人のために朗読しまして、私のまとまりません感話、尽きませんお祝いの言葉を終りたいと存じます。

信ずること
キリストの名を呼ぶこと
人をゆるし出来るかぎり愛すること
それを私の一番のよい仕事としたい

からし種一粒の信仰

諏訪熊太郎

私は百姓だから学問上の話は出来ない。ただ四十何年かの信仰生涯を微力を盡して生きて来た。長い生涯の中で、これは尊いということについておわけしたい。

今晩は私の知った正しき信仰について語りたいと思う。ルカ伝十七章五節～十節迄を読んでみると、弟子たちとイエス様の信仰についての考え方が違っていることに気がつくと思う。イエス様は、からし種一粒ほどの信仰で差支えない、大きくても小さくてもよろしい、それが大きな働きをするのだと仰言る。弟子たちは、信仰とは、精神力とか、霊力とか、信念の如きものを指したのである。前から弟子たちは、何度も信仰がうすいとか、よわいとか叱られて来た。湖が荒れて船中で弟子たちがおそれた時、「なにゆえ臆するか信仰うすき者よ」と言われたし（マタイ伝八の二六）、パンを携えることを忘れた弟子たちが、そのことにこだわり語り合った時、「ああ、信仰うすき者よ、何ぞパンなきことを語りあうか」とも戒められた（マタイ伝一六の八）。

第一の事件は、今日で云えば戦争などの危機であり、第二のは、生活問題の危機とも云えるだろう。だから弟子たちは、どんな危機に直面してもびくともしない泰山のような

信仰を望んだのであろう。それが「我らの信仰を増し給え」という希望となったのである。それに対してイエス様は「もし芥子種一粒ほどの信仰あらば、此の桑の樹に〝抜けて海に植れ〟と言ふとも汝らに従ふべし」と仰せられた。この言葉は弟子たちにイエス様が直接言われた言葉であるからこの中に眞の信仰が語られていなければならない。

私は一粒が大切だと思う。全人格でなければならない。半粒ではいけない。どれ程偉大でも半分では駄目だ。粒のまゝ全人格を委ねることこそ眞の信仰である。三位一体の神学上の問題などどうでもよろしい。神が人間を救わんが為に手をのべられた。この手がキリストである。手であってもこれは神である。手をのべておられる神にどうして委ねないか。片わでもあほうでも、馬鹿でも何でもよろしい。天分なんか問題ではない。それは幼子のような信仰でなければならない。エス様がお話をしている時子供が傍に来たら弟子たちが外え押しやろうとした。するとイエス様は子供を邪魔にしてはいけない。天国はこのような者のものだと仰言られた。これは子供のすることなら何でもよいというわけではなかろう。イエス様が言う幼子の特性は、母に対する信頼の態度であったに違いない。幼子は全部を母親に投げかけて何が来ようと母の懐にありさえすればびくともしない。マタイ伝十六章でペテロが、「なんぢはキリスト、活ける神の子なり」と言った時、イエス様は大変およろこびになられた。然し、イエス様を神の子というだけなら、ゲラセネで、悪霊につかれた者でもそう叫んだ。とすればこれは言葉だけの表現の問題ではない。ヨハネ伝六章でもそうである。「人の子の肉を食はず、その血を飲まずは、汝らに生命なし」と仰言られた言葉に多くの人がつまづき去り、再びイエス様と歩まなかった時、「なんぢらも去らんとするか」と十二弟子に問われた。この時、シモン・ペテロは答えて云った。「主よ、われら誰にゆかん、永遠の生命の言葉は汝にあり、又われらは信じ且知る、汝は神の聖者なり」と。ここにペテロの絶対的な信頼がはっきり示されている。

又ルカ伝十五章の放蕩息子のたとえでもそうである。我がまゝな次男坊は、出てゆく時は堂々と出ていったが、乞食よりも甚くなって帰って来た。しかし、出てゆく時は心が離れていた。即ち失せた人間である。ところが今は無条件でお父さんのもとに帰って来た。それが失せたものを得たのである。

これこそ正しき信仰であると確信する。その結果はどうなるか、桑の木に移れと云えば海に移る。信ずるものにはなし得ないことはない。全能となるのである。

私はこれは誇張だと思った。一昨年私はここにひっかかった。しかしにらめっこをしているうちに、これがわかった。イエス様が弟子たちを前にしてほらを吹くはずがない。これがそのまま本当だと確信した。何故か。私たちが救われたということは、桑の木の移るどころでない大きい事実である。我々は生れのままで罪と、とがによって死にたるものである。そのくされ死んだ者に永遠の生命が与えられた。場所的に云えば地獄より天国に属するものとなったのである。

しかしある人は言うだろう。「それは神のみ旨、み力によって与えられたのだろう」と。そういう時、イエス様はいつも仰せられた。「汝の信仰が汝を救ったのだ」と。ルカ伝十一章十九節、同じくルカ伝十八章四二節をよく見て頂きたい。医したのはイエス様である。しかし盲も癩病もイエス様を信じたので医して頂けたのである。信頼

しなければエス様もなす術はない。エス様は名工である。どんな屑ガラスでも工場えゆけば立派な器になる。同様に全人格をエス様におまかせする時、エス様は私たちを救って下さるのである。

又歴史上桑の木が海え移ったことなどないという疑問もある。しかし私は思う。必要でないことは起らなかったのだと。ペテロ後書三章十節から十二節を見ると、来るべき日に必要とあらば、天地のすべてを燃え崩したもうであろうともある。このことは私一人が信じていることではない。信ずるクリスチャンすべてがそうだったのである。

さてルカ伝十七章にもどって十節のところであるが、人間の主人と同様に、神様は随分無理だと思うようなことをも為せと云われることがある。どんなことでもやらなければならない。そして命じられたことをみなしてしまった時、「わたしたちはふつゝかな僕です。すべきことをしたに過ぎません」そう云えるものにならなければいけない。

再びはじめにもどると、弟子たちの考えるような信仰即ち霊力や信念に頼るものは神の前に自力を誇るようになるだろう。しかし、からし種一粒の信仰者は救われた事をただよろこび、誇りはすべて主によるのみであろう。

自分が駄目だということがわかればわかる程よろしい。キリストを知れば知る程よろしい。そして益々み業にあずかることのみをねがうようになるのである。

後　記

○四月三十日〝信仰一人旅〟の著者諏訪熊太郎先生をお迎えすることが出来た。狂える妻と病弱の身でたゞ主の栄光のために四十何年の信仰生涯を歩んで来、今また福音の灯ををたかくかゝげて難聴と心臓衰弱と肺結核の身をさゝげる為に文字通り一人旅を続けられる老戦士。これを何千何万の信者の熱狂的歓迎の中に来り去った外人伝道者と比較する時、私たちは一人の日本人としても感慨なきを得ない。しかし、主イエスは如何に来たり、如何にして十字架上に、血を流し給うたか。世紀の大伝道者ではない。永遠の生命の主はかくも無惨な敗北の中に神なる主の責をすべて果し給うた。今更私たちに言うべき言葉は一つもないのである。そしてそのことが諏訪先生のすべてであることを又私たちは知るのである。

○四月三十日は又私たちの愛する小貫兄の結婚祝会の日でもあった。席上先生は次のようなことを言われた。「儀式はどうでもよろしい。なくてはならぬのは生命である。頭と身体は生命のつながりである。だから時々刻々を生きているのである。頭はキリストである。キリストは主である。即ち主君である。自己は従とならなければいけない。従うのに大切なことがある。これに二つの生涯がある。一つは進んで御命令に従って生きることであり、他の一つはじっと忍んでゆく生涯である。その何れもが尊い。進んでゆく者も退いて忍ぶ者もキリストのみ声に聞くことが必要である。キリストのみ声は信じた者の良心に聞える。かくかくなすべしという良心の義務感、これに従うことが大切である。そこに夫婦の道も自らに学ぶことができよう」と。

○本号は種々の理由で遅刊を余儀なくされた。私の健康が害われた時、愛する人たちがガリ切りを手伝ってくれた。すべてが感謝の一語につきる。ご健斗を切に祈ります。

昭和三十一年五月　発行
水戸無教会第十三号
実費十円〒共
編集兼印刷人　半田梅雄
発行人　松本文助
発行所　水戸市東原町
水戸幼稚園内
水戸無教会